
Fly Away

館波実笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F l y A w a y

【Nコード】

N 3 3 1 3 B

【作者名】

館波実笠

【あらすじ】

魔法の使える世界。それにも関わらず、人は空を怖れていた。なぜ怖れるのか？怖れる必要などあるのか？……空への夢を抱く、一人の少女の物語。

第1話（前書き）

ファンタジー、というよりはノージャンルものですかね……「WILD CAT」に比べれば恐ろしく短くなりますが、短編としてお楽しみください。

第1話

広がる青空。

誰もが夢見る、その先の世界。

ただ、恐れもする。

だから私は求めた。

その先へと飛翔ぶことを。

さまざまな呪縛から解き放たれて飛翔ぶことを。

Fly Away ｝ over the sky ｝

この世界の人は魔法が遣えるにも関わらず、空を飛ぶことを恐れた。

青い空へ飛ぶことを恐れた。

何が人をそうさせるかはわからない。一説には空に住まう悪魔のためとされているが、そんなものを証明する者なんていない。だからなぜ恐れるかは、私にとって謎だった。

だから、私——ゼフィルス・ジェンクスが生まれたときからこの世界に空を飛ぶモノは存在しなかった。

小さな町工場がゼフィルスの家だ。

インターポス・ストリング国。その王城の城下町として彼女の住まう町は広がっている。王城の城門から続く大通がその町の中央に横たわるようにして通っており、道の左右には商店などが続いている。ほとんどが四、五階建ての建物で二階部分から上はアパートメントとなっていた。

そんな町の一角にゼフィルスの家がある。よく言えば鉄鋼業……

簡単に言ってしまうえば鉄板を作ることを主としている工場だ。ここで作られた鉄板は、家具はもちろんのこと、武器などにも使われているという。

ただそんなこと、彼女には関係なかった。彼女は別に普通に誰かのために仕事をする気などさらさらなかったのだから。

ゼフィルスには野望がある。それは空を飛ぶことだ。誰もが恐れてやったことのないであろう、空を飛ぶこと。生まれたときからと言っても過言でないほど彼女の空への憧れというものは強かった。ただひとえに空を飛びたい。自由にして自在なる世界を飛んでみたい。そういう想いでいっぱいだったのだ。

空を飛ぶという夢。

しかし現実というものになることが難しいから夢というのである。国の法律で空を飛ぶことは禁止されているのだ。もともと恐れて行こうとしない場所をさらに国が行くことを禁止しているという現実。それがゼフィルスにとっては一番の問題だった。

カーンカーンと乾いた音が小気味よく響く。

溶かした鉄を型に入れ、さらにそれを冷やし、次に形を整えるため叩く。それがジェンクスカンパニーの簡単な仕事内容である。もちろん形成などもやるが、最近ではそれ専門の職ができてしまったため、ほとんど形成の仕事は行っていない。

「ふう……アツ……」

額に浮かび上がった汗粒を首に巻いてあったタオルで拭う。ぺたりと額に髪が張りついた。ポニーテールにしているにも関わらず腰の辺りまで伸びている髪は、透き通るようなアッシュブロンド。同じ色の瞳が真剣に目の前の微妙に歪曲した鉄板を睨んでいた。

「もう少し……かな」

手にとって目と同じ高さに持ってくる。曲線を描いたそれにはいくつかの穴が均等な感覚で穿たれていた。

「ゼフィー、またやっておるのか？」

そんな彼女の後ろからしわがれた声がかけられる。ゼフィルスが振り返るとそこには彼女と同じ色——よりも少し色あせた髪をした老人が立っていた。彼女の祖父であり、工場の創設者であるウィンド・ジェンクスだ。

「おじいちゃん……」

「ふん。たまに工場にいたると思えば、またくだらないものを作っているわけか」

ウィンドの鋭い目がゼフィルスに向けられた。憤然としているような、それでいて呆れているような感情がこもっているように見える。

「くだらないって何よ……お父さんの夢を馬鹿にするの？」

ゼフィルスが負けじと言い返す。

そう。彼女の夢——それは彼女の父親の夢でもあった。

「馬鹿以外の何だと言うのじゃよ、空を飛ぶなんぞということが。まったくもってくだらない。そんなことをしているようだったらちやんと仕事を手伝え」

「嫌よ。私は絶対に空を飛ぶ。それをここで作ってみせる」

「くだらないな。お前の父親も同じことを言っていたよ。まったく、そんなことを言い出さなければ、あんなことにはならなかったというのにな」

ただそれだけ言うとうィンドは踵を返す。その後姿をゼフィルスはただただ見詰めるだけだった。唇を噛んで。

第1話（後書き）

次回もよろしく願いします（＾Ｏ＾）

第2話

父親が遺したものの。それは今の世界では無謀とも思える夢と、しわくちやになった設計図だった。軍隊にもいたことのある父親はそこで学んだ知識と家業から学んだことから、自力で飛行機的设计図を描いた。

小さい頃からゼフィルスは父親の夢を聞かされていたので、自らもそれを実現しようと志を持つまであまり時間はかからなかった。そして幸か不幸か彼女にはそれを完成することのできる才能があった。

ゼフィルスはすでに物置と化している工場の隣にある旧工場の扉を開けた。どこか物置のわりにがらんとしているそこには、砂色の布がかけられた何か巨大なものが横たわるようにしてあった。

布の端にはフックがつけられており、その先には小型のクレーンがあった。ゼフィルスはそこから伸びていたスイッチを入れる。少し錆びたような音とともに布が引きずられるようにして剥がされていった。

「シルフィード……」

横たわるのは銀色の翼を持った鉄の鳥だった。鋭い流線型をしたボディに、薄い羽、先端についた三枚のプロペラ。両翼はつけ根の部分から折りたたまれるようにして鳥の尾の方へ向いていた。三つの車輪が止め具で止められている。

父親と同じ名の飛行機はほぼ完成していた。

ゼフィルスはその機体を優しく撫でた。ひんやりとした鉄の触感が伝わってくる。冷たい鉄の塊なのだが、この飛行機はゼフィルスにとってとても愛おしい存在であった。

どんなに馬鹿にされたっていい。不可能と言われてもいい。

先ほど完成した最後の機体壁面のパーツを組み込む。ちょうどエンジンのアクセスパネルに当たるものだったので、蝶番をネジでは

め込んだ。

「……よし、できた」

手段は完成した。ただ一つ、ゼフィルスが空を飛ぶには問題があった。

それは飛行機を飛ばすだけの長さのある直線だ。父親の設計図とともに遺された資料には飛行機を飛ばせるだけの力を得るための助走距離も書かれていたのだが、それほどの長さが稼げるほどの道がこの町にはなかった。いや……正確には違う。

「うう……ん……」

ゼフィルスは自室の机に町の地図を広げ、頭をかかえていた。ランプで照らされた地図には町の詳細な道路が書き込まれている。曲がりくねった通りや小道がほとんどであり、長い直線はただ一本のみ。

ロードオブザロード。

王城から国外へと伸びる最長の道。一つだけの例外。しかしここを使うことは極力避けるべきだった。

それは第一に空を飛ぶという事項が禁止されていることにある。ただでさえ法律で禁止されていることを行うのに王城から続く道を使うのは、見つけてくださいと言わんばかりだ。もちろん城下町のどこで行っても同じだろうが、目立つ度合いが違う。

第二の理由はその通りが商店などを開いているため、長さはあっても広さがないことにある。シルフィードの両翼が広がった状態では確実にそれを建物の外壁に擦ることとなる。これでは飛ぶ以前の問題だ。

「やっぱり無理よねえ……」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。

シルフィードを完成させたことで、ある程度の達成感を得てしまった。山を八合目ぐらいまで登ってしまい、もういいか、と思ってしまったような、そんな感覚に陥っていた。

だが――

「ここで諦めるわけにもいかない、か」

事件が起きたのは翌日のことだった。

第3話

何か騒がしいような気がしてゼフィルスは目を覚ました。普段なら通りにもそんなに人のいない時間にも関わらず窓の外から人の話し声が聞こえてきた。

「……何？」

寝ぼけ眼を擦りつつ窓に近づく。

「え？」

眼下ではウィンドと……灰色を基調とした制服を着た数人の憲兵が話している最中だった。

「ここで不法な……飛行機械が作られているという噂がある。調査させてもらいたいと言っているのだ」

「そんなもの知らんと何度言ったらわかるのじゃ。うちはただの鉄板しか作っとらん」

「ふん。あくまでもシラを切り通すというのなら、こちらも考えがあるのでな」

今まで話していた憲兵の後ろにいた杖を持った憲兵が前に出る。ゼフィルスにはその杖がすぐに術式展開用のものだ……つまり魔法を使うためのものだと思った。

「……っ？」

ウィンドもそれを理解し身構えたが、そんなことは相手の束縛系魔法に対しては無意味以外の何ものでもなかった。まるでその場所だけ時間が凍りついたかのように、ウィンドは一瞬前の動作のまま静止する。

「……探せ」

話をしていた憲兵が部下に指示を出す。

「……いけない……！」

気がつくと体が先に旧工場へ向かっていた。

パンツ！

ゼフィルスが裏口から入ると憲兵たちが表側から突入したのはほぼ同時だった。鉢合わせしてはまずいと慌てて物陰に身を滑り込ませる。見つかったとしても捕まってしまうたらすべて終わってしまう。「探せっ……と、そこまでする必要もない、か」

「……これが飛行機ですか？ ギブリ隊長」

「だろうな。カバーを剥がせ！」

ギブリと呼ばれた憲兵の男はそう言い放つと、目深にかぶっていた帽子をとった。おかつぱ気味に切られた金髪が溢れるようにして揺れた。

「へえ……よく造ったものだ」

どこか満足げにギブリは銀色の機体を撫でる。

「馬車に繋がりますか？」

「ああ。そうしろ」

部下の提案に頷くと、

「ん……？」

目の前にある機体以外はほこりのかぶった物の多い室内を見回す。

「お前がコレを作ったのか？」

部下が馬車に取りつけるための道具を取りに行くため工場から出て行ったのを見計らい、口を開く。まるで他の誰かには会話を聞かれないかのようにだった。

ゼフィルスも気づかれてしまったのでは仕方がないと思い、姿を現わした。

「ええ。そうよ」

ギブリが驚くのがはっきりとわかった。今日の前にある飛行機を一人の少女が作ったのだというのだから当たり前といえば当たり前だ。

「夢……か。父親の」

「……何でそれを？」

彼女にとっては彼の言葉は意外以外の何ものでもなかった。

「お前の父親は……軍隊にいたろ？ シルフイード・ジェンクスといえは前大戦じゃ有名人だ。ま、お前の生まれる前の話だがな」

どこか遠くを見る目でギブリが言葉を続ける。

「彼は、俺の隊の隊長だった。その頃からあの人は空を飛ぶことを夢見てた。もちろん違法って知っていながらな。今思えばあの人はあの頃から目をつけられてたんだろ。ただ俺は別に反対はしなかった」

「それじゃ……」

「賛同もしなかった」

ゼフィルスの言葉はギブリの言葉に消された。

「だから今こうしてあの人の家族を取り締まることができる」

ゼフィルスが顔を上げると、その視線から逃れるようにしてギブリは目を背けた。

「これから、この機体は王城へ運ばれ、明朝に解体される」

それだけ言うのと制帽をかぶり直す。工場の外から部下が戻って来るようだった。ゼフィルスは再び身を隠す。

「……シルフにそっくりだ」

それだけ最後に聞こえた。

第4話

運ばれていく機体。それを見送りながらも、ゼフィールの頭の中をギブリの言葉が反芻する。

「ギブリ・ロフトゲートだったの」

ウィンドがゼフィールの傍らでつぶやく。

「知ってるの……？」

「シルフの葬儀のとき、最後まであいつの傍にいた男じゃよ。副隊長とか言っておったかの？ 戦争も終わった今じゃ憲兵か」

「………」

「ま、いい機会じゃよ。あいつらの話じゃ、このまま機体を素直に引き渡せば、罪には問わんと言っておるしの……」

視線を前へ向けたままのゼフィールを横目に言葉を続ける。

「諦めるんじゃない。昔の夢など。また新しい何かが見つかる。そうやって成長していくものじゃよ」

「……違う」

ゼフィールは小さく頭を振った。

「そうじゃない。夢は……叶えていくもんなんだ。諦めるものじゃない」

「……ゼフィー？」

「ごめん、おじいちゃん。私行くね」

「ふん……」

腕組みをするウィンドを尻目にゼフィールは踵を返した。

王城までの道のりは表通りを使えば一本道だが、昔から今までの間に作られた小道が大量にあった。

普段から使っている工具箱を小脇に抱え、ゼフィールは小道をひた走る。

何が自分にできるのか、王城まで行ってどうするのか……そんな

ことをまともに考える暇もなく足は走っていた。何もできないなど
と考えるのは嫌だったし、何よりも機体を取り戻したかった。

「ぜえっ……」

昔はよく遊んだ小道だ。迷うことなんてなかった。すると道を
抜けていくと戦前に作られた王城の坑道へと繋がっている。

一度王城の倉庫へは補修修理のために行ったことがあった。おそ
らくそこに今回持って行かれた飛行機は置かれることだろう。ただ
ひたすらにそこを目指した。

やはり飛行機自体は倉庫にあった。ただ普段は使用されない場所
のため、見張りの兵すらいない。

「お待たせ」

シルフィードのタイヤは鎖で壁に繋がれていた。よほどのことが
ない限り動かないようにしておいたためだろう。ゼフィルスは工具箱
からチェーンカッターを取り出すと、鎖を切る。手早く機体チェッ
クをしたが、どこもいじられたような箇所はなかった。

「……でも、どうすれば」

ここまで来たのはいい。問題はその先をどうするかだった。わざ
わざ奪われた物を取り返しに来てしまった。完全に反逆罪といった
ところだろう。もう後戻りはできない。

「前科一犯ってほど軽いことじゃないことは確かね」

「まったくだ。どうしてお前たちはそう軽率な真似をするのか、ワ
シには理解できんな」

「え？」振り向くとそこにはウィンドがいた。三輪のバイクに跨っ
ている。このサイズならば坑道も通れるのだろう。そしてその背後
には――

「それは？」

「ただのバナナじゃよ」

湾曲した二本の……言葉通りバナナのような形をした部品だった。

「それは……飛行艇用の……」

「そう。簡単に言えば浮輪じゃ。昔、ウィンドが使っていた」

「お父さんが……？ そんな。飛行機は完成していなかったんじゃない……」

「あれは嘘じゃよ。正確にはワシが見る飛行機はそれが初めてじゃない。たぶんウィンドも同じ夢を、ゼフィーに見ていて欲しかったんじゃない。まったく押しつけがましいというか……」

どこか面倒くさそうに頭をポリポリとかくと、ウィンドはバイクを機体のすぐ前まで動かした。

「さっさと取り付けてしまおうぞ」

ゼフィルスはウィンドの意図を読みかねたが、彼の指示に従う他なかった。

第5話

憲兵隊の隊長執務室に部下が駆け込んできたとき、ギブリは書類処理を終えたときだった。何事かと眉をひそめる。

「城内に侵入者です」

「見張りは何をしていたんだ？ 王城警護部隊は？」

「それが、旧坑道を使われたらしく……」

ギブリは内心舌打ちした。これだから平和ボケした国は困るのだ。

「……それで、賊は何人でどこにいる？」

「二人で、老人とまだ子どもの女だそうです。場所は第七格納庫。」

すでに隊を一つ集めています……」

「……ジェンクス隊長……あくまであなたの遺志は国に逆らおうというのか……」

部下にも聞こえないほど小さな声でつぶやくと、格納庫へと向かうために上着を羽織った。

浮き具の取り付けが終わった機体はどこか不恰好になってしまっていた。それもそのはずで車輪がそのままだからだ。不安定な立ち方をしている。

「……できた」

「まだじゃ。そろそろ兵が来てしまうじゃろう……」

「……そんな。まだ飛ばすこともできないのに？」

「それは、滑走距離がないということじゃろう？」

おそらくこれはシルフィードもぶつかった問題だったのだろうか、ウインドはすぐに見抜いてきた。

「何のために浮き具をつけたの思っているんじゃないよ」

その言葉にゼフィルスははっとした。

「まさか……セントラル・ライン……？」

何故今まで思いつかなかったのか。ゼフィルスは国の文字通り中

央を流れる運河を思い出した。確かにあの川の幅なら浮き具を取り付けられた機体でも通ることが出来るはずだ。

「何も陸だけが必要というわけでもない。発想の転換じゃな」

どこか自慢げに言うウィンド。

セントラル・ラインは王城地下から吹き出した地下水を源としているため、ここからならすぐそこに行けるはずだった。それに燃料もある。

「それなら！」

「そこまでだ」

倉庫に冷ややかな声が響き渡る。ギブリだ。彼の背後では数人の憲兵が銃を構えていた。

「さすがにここまでしてしまっっては、国家反逆罪で軽いぐらいだぞ？」

最終警告とでも言うようにギブリはゼフィルスを睨んだ。だが彼女は決してたじろぐことはない。むしろその口元には不敵な笑みすら浮かんでいた。

「あなたには……邪魔させない。私は夢のために命をかけられるもの」

しばらくの沈黙の後、ギブリは口を開いた。

「……心意気はいくら強くても構わない。ただこの状況をどう打開する？ 逃げ場はないぞ？」

じり、と憲兵が詰め寄る。ゼフィルスは額に垂れる汗を感じた。

確かに状況だけ見ればギブリの方が圧倒的に有利……何か、何かないのか？

「それはどうかな？」

答えたのはウィンドだった。手には筒のようなものを握っている。ギブリはまさかと目を細めた。

「こんなときに息子の残したものが役にたつとはな」

ピンッと音がして、その筒を放った。

「……伏せろ！」

その叫びと同時に筒が破裂し発光した。キーンと耳を突くような音とともに瞼を閉じていてもはつきりと感じられる光が溢れる。

光が収まりきらないうちにウィンドはバイクに飛行機から伸びたチェーンをつけた。これで引っ張るつもりなのだろうか？

「無茶よ！」

「ワシを誰だと思っておる」

自信満々にそう言うのと、バイクのキーを捻った。ゼフィルスはただ信じることしかできず飛行機に飛び乗った。

「いけっ！」

驚いたことにバイクは機体を牽引し動き始めた。そのまま憲兵たちのいた入り口へと向かう。

飛行機を引く轟音に気付いた憲兵たちは散り散りになり、目の前に迫る機体を回避した。

外に出ればこちらのものだ。

「ゼフィー、エンジンをかけるんじや」

振り返りそう言うウィンドに従い、ゼフィルスはコックピットの中にあるイグニッションバーを回す。力を込め、二回、三回……四回目でシルフィードはその心音を轟かせた。

「う、動いた」

「ここから運河はすぐじゃ。チェーンを切り離すぞ。お前は空へ。ワシはこのまま地上に行く」

その言葉と同時にバイクから繋がっていたチェーンが外される。機体はそこまで引っ張られてきた余力と、自らのプロペラが生み出す推進力で動き続けた。

ウィンドのバイクはそれを確認すると、右へと、王城の坑道のある方へと走って行く。

運河はすぐ目の前だった。

「行けるっ？」

土手のようになっている場所に乗り上げ……
ざぶんっ！

水をかき分ける音。機体は運河に浮かんだ。

第6話

ドッドドッドドッドドッドドッド！！！！

エンジンは軽快なりズムを刻むように脈動している。

ゼフィルスは中腰のままだった体をコックピットにすっぽりと収めると、コントロールレバーを握った。ちょうど自分の足の間にある一本のレバーだ。これで機体の制御を行うことができる。他にも機器は多々あるが、今必要なのはこれだけだ。

不恰好ながらもシルフィードは運河の流れを掴んだ。

「行かせるわけにはいかない！」

彼女を追隨する声。またもギブリであった。スタングレネードから体勢を立て直した憲兵たちは、すぐに運河にある警護船乗り場に向かったのだ。その証拠に彼らは運河を自由に移動することのできるエンジンが搭載されたモーターボートに乗っている。

「しつこい……」

ぎり、とゼフィルスは奥歯を噛み締めた。一体何が彼をそこまでさせるのか到底理解できなかった。……いや、できないこともないか。自分自身、罪を犯してまで機体を奪いに来てしまったのだから。ゼフィルスはコックピット脇にあるスロットルレバーを押し込む。これで機体の速度が制御できる。要はエンジンの回転数を上げることができるのだ。しかし、いくらなんでも、水上で元々飛行艇ではないゼフィルスの機体がボートに勝てるとは思えない。

「飛べれば……飛ぶことさえできれば」

スロットルを限界まで押し込み、左右の翼のタラップを下ろす。このまま機体制御さえうまくいけば、飛べるはずなのだ。

高速で運河を切り裂くシルフィードにぴったりと憲兵の乗るモーターボートはつけてくる。

「……予想外に速いですね」

「無駄口を叩くな。……これ以上近づけないのなら、ここで破壊し

ても構わん」

それは事実上の刑の執行命令のようなものだった。ここであの機体を破壊すれば、乗っているゼフィルスもただでは済まないだろう。

「し、しかし、拿捕が命令では？」

「……やれ」

冷たく言い放つ。部下の兵は反論する力もなく、ボートに備えつけられた機銃に弾倉を装着した。

タタタタタタタタタタッ！

引き金は引かれ、いくつもの光跡がシルフィードに放たれる。

「うそっ？」

まさか本気で撃ってくるとは思っていなかったゼフィルスは慌ててレバーを引き倒す。機体はそれに従い大きく左に傾いた。弾丸は機体をかすめるようにして飛んでいく。あぶないところだ。

「え……っ！」

ゼフィルスは悲鳴にも似た声を上げた。機体が傾いたまま戻らないのだ。左の翼が水面を擦る。少しでもバランスがそちらに傾けば、機体は衝撃で木っ端微塵になってしまうかもしれない。

「も、ど、れええええええ！」

力任せにコントロールレバーを右に引き戻す。尾翼が動き、機体を右に傾ける。

がたがたと機体が軋んでいるようだった。今にも弾けてしまいそうな機体に、ゼフィルスは内心不安だったが、絶対にここでは終わらないと信じていた。

「でりやあああああ！」

ザバツ！

浮き上がっていた方のバナナが着水する。一瞬減速をしたようだったが、すぐに勢いを取り戻す。

「何っ？」

その光景に一番驚いていたのはギブリだった。あそこから機体を立て直すとは……

「ちい……貸せ！」

舌打ちとともに、憲兵から機銃をひったくるようにして取り上げると、狙いを定めた。

せめて、俺の手でその遺志を潰すのが、礼儀だろう。

内心に押し込めてきたシルフィードへの思いが反芻するが、今はそんなもの関係ない。

これで、終わらせる。

ギブリは機銃の照準にしっかりとシルフィードを収めていた。引き金が引かれる。

人は飛べる。空を自在に。

ふとシルフィードがそう言っていたのをゼフィルスは思い出した。小さい頃、そう、よく遊んでもらっていたころの記憶だ。もう戦争も終わり、平和に人々が馴染み始めていたころ。

それは夢だ、と思っていた。だから自分が実現させてみせようとも。

何故、この世界の人は空を恐れるのか？

何故、誰も確かめようとしないのか？

その未知の世界に何があるかを。

ガタガタと揺れるコックピットでゼフィルスは考えた。

ただ、答えは出なかった。元々、空へ行こうとしている人間が、そんなことを考えても無駄なのだ。強いて答えがあるとすれば、諦めだろうか？ 自ら変わろうという精神だろうか？ 先を求めようとする欲求だろうか？

それを人は夢と呼ぶのだろうか？

わからない。

だから知りたい。

ゼフィルスは、レバーを眼一杯引いた。

「ねえねえ、お姉ちゃん、あれ何？」

まだ幼い少年が、彼を連れて土手べりを散歩していた姉の袖を引っ張った。少年は空を指差している。大方、鳥だろうと、姉は空を見上げた。この時季は渡り鳥が国の空を飛ぶことで有名だからだ。「え？」

姉は一瞬驚いたような表情を浮かべた。鳥だと思っていたそれは、羽ばたくこともせず、蜂の羽音にも似た音を立てて飛んでいたからだ。それに鳥よりもずっと速い。

ブ——————ン！！

ぐるりと空に円を描くように飛んだそれは、さらに一度旋廻すると、川下の方へ飛んで行った。

「ねえ、あれ何？」

少年の問いに姉は答えられなかった。

夢は途中諦めるもんじゃない。最後までやって、やり通して初めてわかることだってある。
擦り切れてしまうかもしれない。消えてしまうかもしれない。
でも……それでいいんじゃないのかな？

FIN

第6話（後書き）

いかがでしたでしょうか？……えっ？！終わり？と思われた方もいらっしゃるかと思います。『この話』はここまでです。世界の大きな謎は残ったまま……にはもちろんしません。本来この作品は短編で書いたもので、これで終わりであり、（予想外に好評をいただきましたし）長編として執筆中があります。公開は来月を目指しておりますが、それまでは館波の他の作品でも読んでいただいて、お待ちいただければと思います。これからよろしくお願いします。2007. 1. 15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3313b/>

Fly Away

2010年10月8日15時51分発行